

# 山の学校

Ludus Collinus

北白川の山の上。小学生から大人まで、誰もが好奇心のままに学ぶ場所です。



教室の内観

野鳥の囀りを聴きながら…

## ■ クラスのご紹介

### イタリア語

現在イタリア語クラスで開講しているのは講読のみです。今回は現代作家タブッキの短編小説を読みましたが、今回は美術に関するものを選んでみました。フェデリコ・ゼーリの『わたしの好きなクリスマスの絵』(Le mie nativita')という小さな本です。

頑固なアカデミズムに反抗しつづけたドライでとんがったゼーリ教授が、70歳を迎え、ゆったりくつろいで書いた文章です(1993年に雑誌連載、教授は1998年に亡くなりました)。いつもながら簡潔明快な言葉はそのまま、これ以上はないほどシンプルに絵

画の魅力を語っています。

とりあつかうのは、西ローマ帝国末期のモザイクから、ジョット、ジェンティーレ、ボッティチェッリ、ティントレット、ベラスケス、ティエポロまで、12点の作品です。それぞれの絵に添えられた解説はわずかページ半ですが、興味深い語りに耳を傾けながら多様なスタイルの相違を味わうことができます。

ともかく今回の学習テーマは、美術解説に頻出する用語や言い回しに慣れることです。イタリア語で書かれた美術関係書には難解なものが多いのですが、将来そういった文献を読むための格好の入門書と言えます。(文責 柱本元彦、「山びこ通信」最新号より抜粋)

### ギリシャ語講読

<受講者の感想>

昨年九月からギリシア語講読を受講して、ホメーロスを読んでみます。広川先生には以前大学でギリシア語入門を教はったことがあつて、その時の明快な講義には感心しました。この授業でも、一語一語のニュアンスを丁寧に説明して頂いてをります。ギリシア語は「小辞」といふのが難物ですが、これが分つてくるともつと面白くなると思つて努力してみます。又朗読の仕方は本を読んでも中々分らないのでこの授業に参加したといふこともあつて、特に注力してをりますが、歳をとつて頭

が固くなつてゐる所為か、中々進歩しません。

ところで私が六十才を過ぎてから古典ギリシア語を学び始めたのは、何よりも古代ギリシアが好きだからです。古代ギリシア文化の魅力は、一部門に偏らないその総合性・統一性にあります。彼らの遺したものは、政治制度としての民主政や「自由」の意識から始つて、神話・美術(彫刻・建築・陶器)・悲劇・喜劇・叙事詩・抒情詩・歴史・哲学・論理学・弁論・政治学・数学・天文学・動植物学・医学等々、極めて多方面に亘り、しかも世界的水準からみても、いづれも独創的で超一流であることです。このことから、ギリシア

プロフィール

柱本元彦(はしらもともとひこ)

1961年生まれ。京都大学大学院博士後期過程修了。ナポリ東洋大学講師などを経て、現在は大学非常勤講師、翻訳家。訳書にフェッリーニ『魂のジュリエッタ』(青土社)、ランドルフィ『カフカの父親』(共訳、国書刊行会)、カッチャーリ『必要な天使』(人文書院)、エーコ『カントとカモノハシ』(岩波書店)、レオパルディ『カンティ』(共訳、名古屋大学出版会)など。

### ロシア語講読

「プーシキンなど19世紀ロシアの古典作家の作品を中心に、受講生と相談の上テキストを選択します。初めてロシア語を学ばれる、あるいは再挑戦される方々を対象にした入門コースも開設予定です。」(講師談)

文化は「モデル」「範例」としての意義をもち、これと比較することで現代なり日本なりが一層よく分る、といふことがあります。

ギリシア文化は決して骨董品ではありません。現代でもなほ生きてゐて、切れば血が出るやうな現代性をもつてゐます。ギリシア・ラテンの西洋古典は、我々日本人の教育・教養には殆ど採入れられてをりませんが、これは非常に惜しいといふか、むしろ欠陥だと思ひます。ギリシア語はそれだけ時間をかけて学ぶに十分価するものです。

是非ギリシア語を、そしてギリシア文化と一緒に学ぼうではありませんか。(I.R.さん)

### ラテン語初級文法

<受講者の感想>

私は2009年度に山下大吾先生のラテン語初級文法を受講しました。受講しようと思った最大の理由は英語の理解を深めたいということでした。また、単にラテン語のタベなどでの雰囲気は憧れたという部分もあります。

大学時代の第二外国語ではあまり理解できず苦い思い出しか残っていなかったのについていけるか不安でしたが、それは杞憂に過ぎませんでした。先生が受講生の様子を見て難所をもうまく導いてくださったので、あつという間に初級文法を一通り終えることができました。そのおかげで語学全般に対する苦手意識もなくなってきたように感じます。

その後、当初の目標通りに英語への理解が深まったという手ごたえを得ております。語彙を増やすためには語源を考えるのが有効な方法であることは以前から

薄々気づいていましたが、その確信を得ました。新たな複合語を作る際に子音が変化する法則などを教えていただき、これまでぼんやりと考えていたことがかなりはっきりしました。ラテン語の文法ではやはり活用と格変化に苦労しました。ということは逆に言うと、英語の文法では活用と格変化が極めて少ないかわりに語順の制約や助動詞、慣用表現が多いということです。そのことに気づいただけでも大きな収穫です。

自分よりも年長の方と机を並べて共に学んだということそのものもよい思い出です。山を登って俗世から離れた静かな教室で、遠い昔のローマ帝国の時代の逸話などを聞く時間は、慌ただしい一週間の中で貴重な時間でした。時代は変わっても、いかに生きるかといった根本の部分には共通するところが大きいでしょう。

私などはラテン語に少し触れただけ大したことは言えません。それでもせめて雰囲気だけでも伝えられたらと思い筆を取りました。(A.Nさん)

### フランス語

日本とフランスは、文化的な交流がさかんなことで知られています。日本では、グルメからアートまで、さまざまな分野でフランスのものが人気ですし、一方フランスでも、伝統的な日本文化はもちろんのこと、近年では日本のポップカルチャーにも注目が集まっています。

さて、もしこうした文化的なことに興味をお持ちでしたら、フランス語を学ばれることをぜひおすすめします。言葉を知ることによって、フランス文化への理解はずっと深まりますし、またそれは、逆にフランスの人たちに日本の魅力を伝えるさいにも役立つでしょう。フランス語はなんとなく難しそう、とお感じでしょうか。ご安心ください。このクラスでは、初級文法からゆっくり、じっくり進んでいきますし、少人数制で、疑問点もすぐに質問していただけます。さあ、フランス語に親しんで、少し世界を広げてみませんか。(文責 武田宙也)

## 8/26(金) 古典語の夕べ —ラテン語と漢文

テーマ：古典古代における理想郷

第1部 漢文の夕べ 16:30-18:00

ここからあちらへ —「逝きて將に女を去り、彼の楽土に適かんとす」(楽園への希求の裏側には、現実への失望や嫌悪が潜んでいる。困難と苦悩に満ちた「ここ」を離れ、幸福と調和の世界である「あちら」へ行きたいという願いは、中国古代においてどのように表現されてきたのだろうか。陶淵明「桃花源記」を始めとする中国の理想郷について、現実の苦しみとの対比から考えてみたい。

講師：村田澤(みお)

内容紹介

楽園への希求の裏側には、現実への失望や嫌悪が潜んでいる。困難と苦悩に満ちた「ここ」を離れ、幸福と調和の世界である「あちら」へ行きたいという願いは、中国古代においてどのように表現されてきたのだろうか。陶淵明「桃花源記」を始めとする中国の理想郷について、現実の苦しみとの対比から考えてみたい。

第2部 ラテン語の夕べ 18:30-20:00

黄金時代は蘇るか —ウェルギリウスにおける黄金時代再来のテーマ

講師：山下太郎

内容紹介

古代ギリシアの詩人ヘシオドスの語る五時代説話はいわゆる黄金時代のテーマとして、後代の多くの詩人たちに様々な形で詩的着想を与えた。ウェルギリウスもその例外でない。理想郷の代名詞としての「アルカディア」を創造したこの詩人は黄金時代のテーマをどのようなものとして表現したか、その独自の視点をあつづけてみたい。



学校法人 北白川学園 山の学校/北白川幼稚園 〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41